貴族の遊ぶ淀川沿岸　鳥養院　鳥養牧

奈良時代の後半になると、都では貴族や僧の勢力争いが激しくなり、国の財政も乱れてきました。そこで、桓武天皇は都を寺院等旧勢力の集中する奈良から京都に移して、中央集権的律令政治の再建をめざしました。しかし、藤原氏を中心とした貴族は、皇室と姻戚関係を結ぶなどして次第に勢力を伸ばし、摂政・関白を中心とした貴族が支配する世の中を作っていきました。

また、土地の私有化が押し進められるなかで、これを守り拡大するための武力集団として、武士が台頭し勢力を伸ばしてきました。

都が京都に移ってからは、摂津市域など都の近郊は、生産・交通・遊興など都の生活を直接に支える役割を果たし続けることになりました。

淀川と三国川（神崎川）をつなぐ

淀川は、都が淀川上流の京都盆地に移ることで外国や国内の他地域と都を結ぶ幹線としてさらに重要なものとなります。しかしその反面、淀川がもたらす水害が脅威となり、古代から水との闘いを強いられてきました。

桓武天皇は、785 年に比較的水量の少ない三国川と淀川をつなぐことで、水勢を抑える工事を鯵生野（アジフノ・摂津市域の味生・別府の辺り）で行ったという記録が見られます。（続日本紀）しかし、同年早くも大洪水があり新水路の完成も効果がなかったようです。

この河道は、明治 11 年に付け替え工事をして、現在のように直川化されるまで使われました。

「天下第一の楽地」の江口

それ以来、京都と外国や西国を結ぶ往来は、この淀川・神崎川・瀬戸内海コースが中心となります。そして淀川から神崎川への分岐点にある「江口」は宿泊や休憩の好適地として栄えることになります。さらに、皇族・貴族たちの四天王寺・住吉神社等へのお参りや熊野詣なども盛んになります。このルートは江口を経由してそのまま淀川を下ることになりますが、彼らも江口を盛んに利用しました。

こうしたことから江口は「天下第一の楽地」と呼ばれるほど賑やかな土地になり、「遊び女（アソビメ）」を囲う家が軒を連ねるようになっていきます。

ここの「遊び女」は高い学識と遊芸の力を持っていたといわれ、西行法師と遊女「江口の君」との交流を描いた謡曲「江口」を初め多くのエピソードが残されています。

神崎川を挟んで江口の対岸に位置するのが摂津市域の「一津屋」です。この「津屋」というのは港の貨物輸送仲介業者を意味します。主として中世以降、このあたりは淀川と神崎川という大動脈の物流の拠点になっていったと想像されていますが、平安期にはすでに賑やかに船の行き交う場所だったことはまちがいありません。

宇多天皇の離宮「鳥養院」

淀川の両岸のあちらこちらには、皇族の離宮や貴族たちの別荘がありました。水無瀬・山崎・枚方・吹田などに多くあったといわれます。

伊勢物語には、主人公の在原業平（アリワラノナリヒラ）が惟喬親王（コレタカシンノウ）の離宮「渚（ナギサ）の院」（枚方市）に遊ぶ場面があります。ここは、桜の名所として有名でした。摂津市域の鳥飼上にあった、宇多天皇の離宮「鳥養院」も有名で、いくつかの文芸作品にも登場し

ます。中でも大和物語の次のくだりがよく知られています。

宇多天皇が大勢の人を従えて鳥養院で遊んでおられるときのこと、周りにいる江口から呼んだ遊女の中から「大江玉淵の娘」を選び出された。そして、「とりかい」という題で和歌を詠（ヨ）むように命じられた。

大江玉淵の娘は

あさみどり　かいある春に　あひぬれば
霞ならねど　立ちのぼりけり

と詠んだ。天皇はたいそう感激して、衣服を与えられた。同席の公家たちも天皇に倣って自分たちの衣服を与えたところ部屋いっぱいのたいへんな量になったということです。

鳥飼上に「御所垣内」という旧小字名が残っていることから、鳥養院はこの辺りにあったのだろうと考えられています。

公営牧場の「鳥養牧」

日本書紀を見ると、すでに６世紀には、淀川沿岸に牧場があったことがわかります。平安時代になると、淀川および大和川沿岸には、国家の経営する「公牧」や有力貴族たちの持つ「私牧」が多数できました。

摂津市域の鳥飼にあった「鳥養牧」は、右馬寮が管轄する公牧で、諸国から送られてきた牛馬を飼育し、都での必要（引き牛や乗馬）に応じてすぐに供給するための「近都牧」のひとつでした。

ここには河港があり、住吉神社や高野山などの参詣の途上に、この港に立ち寄って宴会をしたり、鵜飼を見ながら貴重な氷を食べたりした記録が残っています。

紀貫之も、任地だった土佐から都に帰る途中で、鳥養牧の近くで停泊したことを土佐日記に書き残しています。

鳥養牧のあった場所は、藤森神社の近くに「御牧」「馬場垣内」という地名が残っており、この周辺が中心だったと思われます。

また、その近くにある五久という地名は「御厩（ゴキュウ・御馬屋）」からきているのではないかといわれています。さらに、以前その近辺に「馬島」と呼ばれる淀川の中州があったと伝えられています。

「味原牧」宮内省に乳製品を提供

鳥養牧の少し下流には「味原牧」と呼ばれる特別の役目を持った牧場がありました。

この牧場は、宮内省の典薬寮という宮中で必要な薬を調達する役所の管理下にありました。乳牛を飼い、栄養価の高い乳製品を作って宮中に提供していたのです。

牛乳を煮詰めて濃くしたものは、酥（ソ）または蘇と呼ばれて、たいへんなごちそうだったといわれています。特に美味なことを表現する醍醐味（ダイゴミ）は、もともとこの酥のおいしさを意味した言葉だという説もあります。栄養価の高い乳製品は、薬でもあり、同時に特別のごちそうだったようです。

広がる私有地「荘園」

平安時代は、律令制のもととなっていた「公地公民」の原則が大きくくずれていって、土地の私的所有が広がった時代です。

農地を拡大していく政策として、開墾した土地の私的所有が特例として認められ始めてから、力のある貴族や寺院、そして地方の豪族が広大な私有地を獲得していきます。これを荘園（ショウエン）と呼びます。

荘園の中には税金を納めなくてもよい〈不輸の権〉、役人が立ち入ることを拒むことができる〈不入の権〉を持つところも現れて、貴族などの力はいっそう大きくなっていきます。

平安時代の摂津市域では、権勢をふるった藤原氏に関係する荘園が、いくつもあったようです。

現在の鳥養牧跡（石碑）
鳥飼下三丁目所在